

一心寺かわら版

第四号 平成十七年二月発行

「真宗の利益」

現在私たちの生活に仏教が浸透しているとは言いがたいですが、時々仏教に関することを見聞きすることがあります。昨年になりますが、稲盛和夫さんの『生き方』という本が発売されました。稲盛さんは京セラ、KDDIを創設した企業家ですが、自らの生き方には仏教が影響を与えているということで、本の中でそれに触れていたの手に取りました。

彼が生まれた鹿児島は江戸時代薩摩藩が念仏を禁止していたために、念仏者は隠れ念仏といって密かにその教えを伝えていた伝統を持つ土地柄です。彼は小さい頃父に連れられて一緒にお念仏したそうで、その時に教わった「感謝することの大切さ」が私の心の原型を作ったとおっしゃっており、今は得度して僧侶になられているそうです。ですからこの本の中には、なるほど仏さまの教えをいただかれた言葉だなと思うところがあります。

「どのような哲学に基づいて人生を歩んでいくかによって、その人の人格が決まってくる」

「照る日も曇る日も変わらず感謝の念をもって生きること。・・・そもそも今自分が生きている、生かされている。そのことに對して感謝の心を抱くこと。その実践が私たちの心を高め、運命を明るく切り開いていく第一歩となる」

「足るを知る・・・物質的にはどんな条件下にあらうとも、感謝の心をもてれば、その人は満足感を味わうことができるのです。」
「自分よりも他者の利を優先するという心は、人間のもつすべての徳のうちで最上、最善のものである・・・利他の心が生まれたとき、人間は欲に惑わされず生きることができる。」
などなど。

しかし仏教、真宗の教えに照らし合わせて考えると気になることがあります。

「原理原則に基づいた哲学をしっかりと定めて、それに沿って生きることは、物事を成功へと導き、人生に大きな実りをもたらします・・・確固たる哲学に基づいて起こした行動は、けっして損にはならないものです。一時的には損に見えても、やがてかならず利となって戻ってくる」

正しい考え方に沿って生きていけば、人生が成功する、損はせず利益があると読み取れます。確かに教えに従って自省しながら一生懸命に生きることによって周りから認められ成功することはあるでしょう。しかしそれは結果としてそうだったということ、本来仏教は社会的な成功を得るための教えではありません。

それでは真宗における最も大きな利益とは何でしょうか。仏さまの救いについて稲盛さんは、

「神や仏は・・・おのれの力の至らなさを反省し、また明日か

ら、なそうと倦まず弛まず努力する。そういう人こそ救ってくださるのです。」

とおっしゃいます。しかし、私たちは日々努力しようとしてもできず、煩惱に振り回され続けて欲をむさぼり人に迷惑をかけて生きています。しかもそれに気付かず、また気付いたとしてもできる限り愚かなところを隠そうとします。また少々反省することはあっても、まだあの人よりはましだというようにごまかして心の底から慚愧することは無い、偽りの人生を生きています。

相田みつを氏の詩に

「弱きもの人間 欲ふかきものにんげん

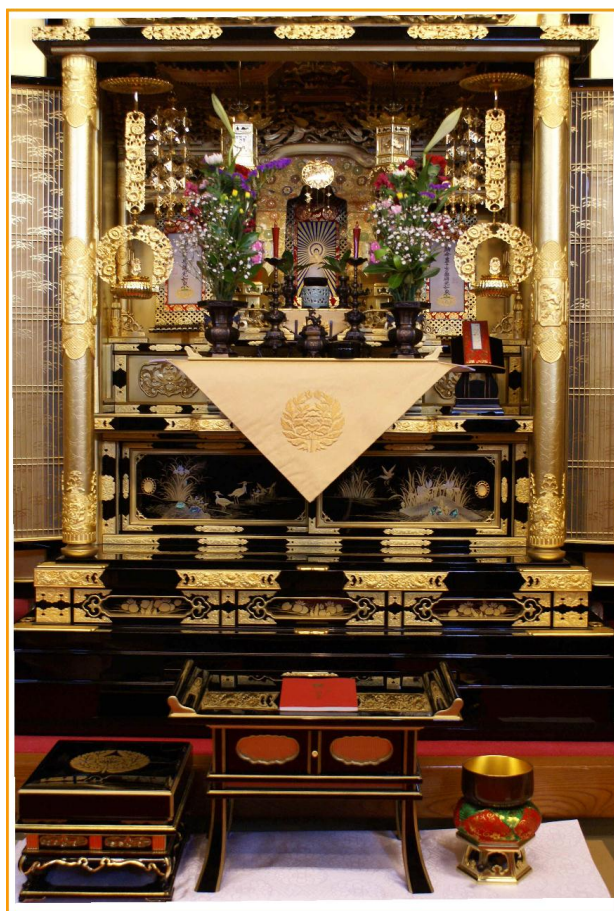
偽り多きものにんげん そして人間のわたし」

とあります。

そういう私に、真実のいのちとなつてくれと願い続けて下さっているのが阿弥陀仏です。人間の姿を見通され、私のことを心配して下さる仏の心はいつしか自然と響いてくるのでしよう。ある僧侶は「人間凡夫になれたら一人前、仏さまの前に立たねば凡夫になれぬ」とおっしゃられています。

智慧と慈悲を持たれる仏さまの前に立つと自身は煩惱にまみれた存在であると自覚せざるを得ません。同時にそんな私を見捨てることなく、真実の世界である浄土へと生まれさせるべく願いを続けて下さっている阿弥陀仏、私という存在を許して下さい下さっている周りの方々への感謝の心が起きてきます。今浄土への道を歩んでいると聞かせていただいて、仏さまの慈悲に包まれた安心の中で慚愧と感謝の日暮らしをしていくのが真宗門徒なのでしよう。

真宗仏事について④お仏壇



お仏壇とは「仏さまを安置する壇」のことであり、浄土真宗では阿弥陀仏をご本尊としています。さまざまに執着し、悩み苦しんでいる私の心の依りどころとして安らぎを与えて下さり、浄土へと導いて下さるのが阿弥陀仏です。

お仏壇には金仏壇や唐木仏壇などがあります。真宗では真実の世界である美しい浄土をあらわすために金仏壇を本式にしています。しかしご本尊を迎えることが大切ですので、お仏壇の大きさ、種類を気にすることは無いでしょう。

それではご先祖はどうなったかというところ、阿弥陀仏の浄土に往生され仏さまになられているのです。みなさんのご先祖は私たち

の本当の幸せ、阿弥陀仏の本願を信じて安らかな人生を歩み、後に同じく浄土に往生して仏となってくれと願われていることでしょう。阿弥陀仏とご先祖は私たちのことを念じておられるのです。その仏さまの心を「南無阿弥陀仏」とお念仏していただくわけですから、そのお念仏は仏さまへの報恩感謝なのです。

真宗では、お仏壇にご本尊をお迎えするときの法要を「入仏法要（式）」（お移しするときの法要は「遷仏法要」といいます。入仏といってもお仏壇に魂を入れる（性根入れ）のではなく、ご本尊をお迎えしたことを喜ぶものです。

また「お仏壇は家の中に亡くなった方が出ないと迎えられないもの」といわれます。しかし考えてみれば、私につながる数限りないご先祖が仏さまとなられているはずです。私たちみなを導いてくださるのが阿弥陀仏ですから、日々家庭で、またお寺にお参りして手を合わせお念仏したいものです。

お墓

私たちは亡くなられた方の遺骨をお墓に埋葬します。しかし、お墓に故人が居られるわけではなく、浄土へ往生され仏さまとなられています。仏さまとなられた方はみな俱会一処（ともにひとつのところで会う）の浄土から私たちを救うためにお念仏の法を説いて下さっているのです。ですから真宗では浄土をあらわすお仏壇の前で法事を勤め、基本的にお墓でお勤めをすることはありません。

お墓はお骨を納めて、故人を敬い讃えるために建てるのです。さらにいえば、かけがえのない命を私に伝えて下さったご先祖に

感謝しつつ、その命を精一杯生きてくれという私たちへのご先祖の願いを聞く場でもあります。お骨を前にして諸行無常のことわりを噛みしめ、生死を超える確かな依りどころとなるお念仏の教えをいただきましょう。

また、分骨は故人の身が裂かれてバラバラになり迷ってしまうからしてはいけないという人がいるようです。しかし分骨によって、縁のある人々が少しでも多く故人の遺徳を偲び、仏さまの慈悲に出会えるご縁となれば喜ばしいことでしょう。

墓石には、阿弥陀仏によって救われる真宗門徒として「南無阿弥陀仏」の名号を刻むようにしましょう。もしくは、みなお浄土で会うという意味で「俱会一処」としても良いでしょう。また法名を刻む石は「法名碑」としましょう。お墓でのお勤めもお仏壇の時と同じく「性根入れ」とは言わず、「建碑法要」などといいません。お墓参りにはお灯明・お花・お線香を供えて手を合わせ、お念仏しましょう。

